第 211 号
平成４年（1992年）７月８日

関西大学通信
THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

関西大学広報委員会
大阪府吹田市山手町3-3-35

甘粛省の漢の長城遺跡。右は同所より出土した漢簡で隧名の「玉門當谷隧」がわかる

漢の長城 シルク・ロードのまもり
――木簡の故郷を訪ねて――

――大庭 脩

青黒い小石と礫の中を、ランドクルーザーが砂塵を巻き上げて四〇キロで走る。上下左右に振れて、何時体がはねるかわからないから、カメラは千分の一にセットしてブレに備えている。視野にはゴビ灘しかない中を、小方盤城を後に西へ走るうちに、遂に漢の長城が見え始めた。

今世紀初頭、アウレル・スタインの探検隊が漢の木簡を一〇点掘り出したT18i遺跡、漢代の玉門當谷隧（ぎょくもんとうこくすい）という見張台の近くで車を止めて、我われは強い北風に髪の毛を逆立てながら、長城を北へ越えた。車のいる側とは対照的に、砂がたまって長城が低い。漢の兵士たちが常に「除土」という作業をしていた記録の意味がよくわかる。匈奴側の城の斜面が段々低くなっては、長城の価値が失われるからである。

砂を叩きしめて葦を積み、それを接着剤にして又砂を叩いて積み上げた長城の断面がよくわかる。

漢簡研究を始めて四〇年、簡の出土した所へ行って見たいという思いがやっと果たせたが、つい先程も、玉門関の遺跡といわれる小方盤城の周囲で、同行の甘粛省文物考古研究所員、何双全君が、ヒョット漢簡を一本地表から拾い上げた。河平元年（前二八）の年号がはっきりと読めた。砂が吹き飛んで、漢代の地層が露出して来た為で、時に羊飼が拾って来ることもあるという。

蘭州から一二〇〇キロ、四日がかりで遺跡を見ながら敦煌まで走って来た。この場所は敦煌から直線距離で九〇キロの地点である。日本学術振興会の派遣研究者として私を迎え入れた甘粛の研究所では、所長の岳邦湖氏と、省博物館長の初世賓氏が歓迎にあらわれ、初対面のあいさつをしながら、私がこのランクルの旅に耐えられるかどうかを探るような目付をした。一九九〇年夏のことである。

去年は、本学の卒業生や院生を含む漢簡研究会の皆と共に、蘭州の漢簡国際研究会に行って、現代のシルク・ロードをバスで走り、敦煌まで来たが、勿論ここへは来なかった。それどころか飛行機の都合で敦煌の日程が短くなって、陽関遺跡へ行くか、莫高窟へ行くかの二者択一を迫られ、漢簡部隊は陽関を選んだ。現に私が玉門関へ行った日も、前日は風雨があり、この天気が明日までつづけば危険で行けないと言われていた程天候に左右される。その代わり、前日の風雨で河平元年簡が顔を出したのだともいえる。

今年は十二月に、百周年記念会館に、岳氏を始め甘粛の仲間や、北京の仲間を迎えて、国際シンポジウムを開くことにしている。多くの人は九〇年のランクルの旅から数えても三回目の顔ぶれで、まさしく老朋友、ランクルのドライバーが来ないのは残念だけれど、岳邦湖さんの発掘報告のスライドが美しく、今から楽しみである。

（文学部教授）

HEADLINE

3 面 東西学術研究所が中国の大学機関と学術交流協定
4・5面 MY HOMETOWN
6・7面 私の関大受験時代 PART II
8 面 情報処理センターから

千里眼

例年、五月の連休が過ぎるとキャンパスはスーツ姿の学生たちで賑わう。七月の声を聞くと就職戦線はもう終盤である▼安堵感に満ちた顔もあれば、まだ見通しがたたず、あるいは志望がかなわず厳しい顔つきをした学生たちもいる。会社を訪問し面接を受けて、彼らがこれまでの学生生活を振り返る瞬間でもある。意中の企業の内定を得た者は自分に自信をもち、他方、反省しきりの者もいる▼各人の満足度に差はあるが、おおむね近年の就職状況は好調である。たしかに来春の採用計画を大幅に縮小する企業をはじめ、大手メーカーも軒並み一割以上縮小するなど、就職戦線は近年にない厳しさである。だが心して臨めば目的は十分達成可能な状況である。もう少しすれば、晴れ晴れとした顔をして「彼ら」はゼミナールに出てくるであろう▼「彼ら」はもうすぐスーツを脱ぐのだろうが、「彼女ら」はそうはいかない。いわゆる「男女雇用機会均等法」施行以来、女性の職業意識・職場進出は大きく進んだと言われている。だが来春の採用計画を見ても、経済が陰れば縮小の犠牲となるのはまず女性である。就職戦線の厳しさは「彼女ら」の厳しさを意味している。是非この難局を突破してほしいと思う。

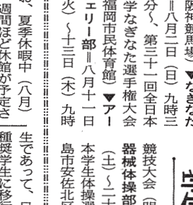
（M・H）

「access」

法学部が創刊 学習案内'92

この冊子は、「法律学・政治学」入門および「関西大学法学部」入門という趣旨で編集されたものである。入学時のオリエンテーション期間中に、学部案内などの各種行事が催されるが、その後は、特にガイダンスのないまま四年間が過ぎく。ひたすら暗記して入試を突破し、大学に入学してみると、覚えるには膨大すぎる情報が伝えられる。できれば簡単に単位を取れる科目をというわけで、俗にいう「楽勝科目」に流れが流れ、ちになるこうした学生は、社会に出てから、「法学部卒ですが、あまり勉強しなかったので…」と頭をかき続ける人生を送ることになろう。

『access』には、このような悲哀を味わうことがないよう、法学部生としてのアイデンティティをもってほしい、との願いも込められている。



法学部事務所刊

関西大学法学部

アルバイト・海外旅行・交通事故

夏休みにご用心・こんなトラブル

キャンパス情報

二か月にわたる夏季休暇を目前に控え、レジャー・海外旅行等の計画を練り、またこれらの資金づくりにアルバイトを考えている諸君も多いことだろう。

長期休暇の休験は、将来、必ずや貴重ものとして自身のなかに根付いていくだろうが、それだけに無為に過ごさず、計画性をもって臨んで欲しい。

そこで、これらの計画に当たり、トラブルが起きる前の注意点として、若干のアドバイスをしてみたい。

1 アルバイト

本学の学生生活実態調査によると、何らかのアルバイトをしている学生は九割を越えている。これは、大学生はアルバイトを通じて社会の労働機構に組み込まれていると捉えることが出来るが、トラブルに巻き込まれないための諸注意を述べておこう。

大切なことは、安全性と就労条件の確認をすることである。大学が斡旋する場合は、教育的に好ましくないもの等の職種については、厳しい制限し取り扱わないが、自分で探す場合でも、自身の安全をはかるために留意することが必要である。

また、アルバイトとしてよくも、労働契約が成立して就労するという筋道にはかわりはなく、事前に雇用主と文書で労働条件を確認しておけば、大半のトラブルは未然に防ぐことができる。大学の斡旋の際に交付した〝アルバイト希望者へ〟を熟読のこと。アルバイト学生たる諸君が注意すべき事項がこまかく記されている。

〈アルバイト斡旋〉

〈アルバイト学生たる諸君が注意すべき事項〉

〈雇用主に対して〉

〈出勤〉

〈就労〉

〈職種〉

〈労働条件〉

〈雇用主と文書で〉

〈トラブルは未然に防ぐ〉

〈トラブルを〉

〈ホームステイトラブルを〉

〈目的を明確〉

〈ホームステイ〉

〈海外旅行保険〉

〈海外旅行〉

〈海外〉

〈海外〉

〈海外

MY HONETOWN

今回の企画は、本年一月号「わたしの故郷」の外国バージョンである。

こんなに狭く窓易にどこへでも行くことのできるようになった日本でも、まだまだ地方の特色は残っているし、一人ひとりに「故郷」への想いがある。

「故郷」から遠く離れて日本[illegible]おさらその想いは強いものがあるだろう

学部・大学院を合わせて、本学には二百人を超える留学生を受け入れているが、ここでは協定校からの交換留学生を含むさまざまな国出身の十二人に、自由な想いで執筆いただいた。

（廣瀬）

＝50音順＝

ソウル、ソウル、ソウル

安衍姫（アン ヨン ヒー）（韓国）

ソウルの実家前の筆者

私が生まれたソウルは韓国の首都で、日本の東京のような大きな都市である。日本とは違って中央集権制度ほかの地方より変化も激しく、発達も早いほうである。

朝鮮時代には漢陽といわれた今のソウルには東西南北に各々大きな門があり、中央庁、市庁などの重要政府機関がこの四大門内に位置している。

儒教思想の影響で性別・身分の区別がいちじるしく、士・農・工・商の四種類で分けられていた。士（ヤンバン）に属する身分は四大門内に住み、男女七歳不同席で男女の区別が顕著であった。家には族報（先祖から現在まで男性の本社もある、古典的な風味名を記入する家内の宝物）があり、女はのせられなかった。

韓民族は風流を楽しむ民族であった。私が生まれ育った安国洞は静かで、近くには秘苑という寺院、最近、話題になっている「現代」グループの本社もある、古典的な風味と現代的感覚が美しく、調和している場所である。また日本でも有名なロッテ百貨店もある。ソウルの中心で交通も便利である。

韓国の大学生たちは、日本のようにまだアルバイトが盛んでないので、大部分の大学生は休みの中はクラブ活動中心になる。男子には一年八か月の兵役義務があり、高校卒業後と大学在籍中の大学生の時、入隊するのが普通である。

圧巻李洞・方背洞は若者たちの聖地である。ここは韓国の代表的なカフェ街である。流行の窓内装飾やかんばしい珈琲を同時に味わえる場所である。市内でもまん中で鍾路区東崇洞にある大学路は土・日に車両禁止で各種行事やコンサートが行われている。仲のよい友達が集まり、のんだり、遊んだり、歌ったり若者の熱気を発散することが許される唯一の自由な街をのみながら人生を語ったり、まじめに自分の考えを話しあうのがよく見られる。彼らにとってはもうすっかりなじみのある若者の故郷なのだ。今日もだれかが胸をはって、空に向かいこう叫ぶかもしれない。

サランヘヨ、ソウル、ソウル。（愛してるよ）

（第一部社会学部・三年次生）

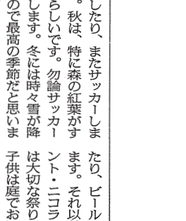
風変わりなカレッジタウン

シュミット・ハッネロア（アメリカ）

私はベルギーからやってまいりました。RCBと申します。現在、関西大学カトリック・ルーバン大学の交換留学生の一人でございます。

私の故郷は、八百人ほどの田舎と言ってもいいかもしれません。日本では「田舎」はちょっと悪いイメージがあるけれど、僕は田舎の方が好きです。ですから家もなくて、土地は二千八百平方メートルです。

特に、子供の心には田舎の楽しい思い出がいっぱい残っています。男の子同士で可愛い女の子をからかったり、サッカーしたり、森のなかでキャンプをしたりしました。都市に住むことのすばらしい経験は無理のようです。残念ですね！



たった八百人の"田舎"

ヴァン・ナイレン・ロブ（ベルギー）

私はベルギーからやってまいりました。ルーバンは大学事です。春にはサッカーしたり、新緑の頃には、ハイキングしたり、またサッカーします。秋は、特に森の紅葉がすばらしいです。勿論サッカーはします。冬には時々雪が降るので最高の季節だと思います。隣の女の子に雪投げをしたり相手の雪キャンプをつぶしたり、ビールをいっぱい飲みます。それ以外で復活祭、サント・ニコラスとクリスマスは大切な祭りです。復活祭の聖人（実際は両親）からおもちゃ、オレンジ、チョコレートの像をもらいます。クリスマスは親戚と一緒においしい料理を食べてから真夜中のミサに行きます。宗教に基づいた習慣が多いです。

このような僕の故郷が気に入ったら、遠慮なさらず、ぜひ一度遊びに来て下さい。たのしみにしております。

HOT ZIENS!

（カトリック・ルーバン大学 交換留学生）

パブに独特の雰囲気がある

ライアン・ジョン（アイルランド）

私は四年半前にアイルランドのダブリン市大学を卒業してから来日し、三年間日本の会社で働いた。もう一度大学生の生活を味わってみたいと思って、関大に入学した。今年の四月からマスターコースで勉強している。

私の故郷はアイルランドの首都のダブリン。ご存知のようにアイルランドは、アイスランドと違うので雪もめったに降らないし、動物園以外に北極熊は一匹もいない。国の位置は北海道より北だが、メキシコ暖流のおかげで冬は日本より暖かく、夏は涼しい。

アイルランドは農業がまだ多く、面積の大部分は緑の野になっているので、国全体はエメラルド島と呼ばれ、夏になると大勢のドイツ人とアメリカ人の旅行者の姿が見える。ドイツ人は俗世間を遠く離れる目的で来るが、アメリカ人の方は家の系図を調べに来る人が多い。アイルランドに旅行する日本人はまだ少なく、来るのはハワイやサイパンに遊びに行くタイプと違い、アイルランドの音楽、文学、景色などに興味を持っている人が一般となっている。

ヨーロッパ全体と同様に、アイルランドの最も盛んなスポーツはサッカー。一九九〇年にイタリアで、アイルランドのチームが初めてサッカーのワールドカップに参加し、PK戦でルーマニアに勝ち準々決勝までに進んだ時、アイルランド全国は熱狂した。

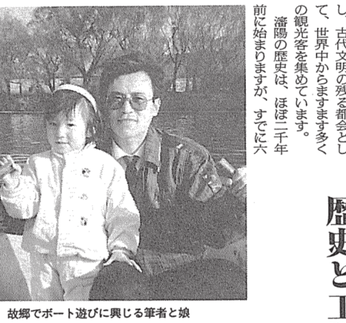
アイルランドの独特な雰囲気を最も感じられる場所はパブである。私の家族は毎週日曜日に教会が終わってから、ダブリン市内のパブにフォーク・ミュージックを聞きに行く。音楽家は日により六～十人でギター、バンジョー、バイオリンなど様々な楽器をつかい、金をもらわずに黒いギネスビールを飲みながらプレーする。正式な雰囲気でないので、回りの人々も一緒に歌い個人で歌うこともある。

（大学院修士課程・商学研究科）

パブで談笑のひとときを（右が筆者）

歴史と工業の大都市・瀋陽

樊世川（ハン セイ セン）（中国）



故郷でボート遊びに興じる筆者と娘

私の故郷、瀋陽（シェンヤン）へようこそ。

北京から北東へ飛行機でちょうど五十分で瀋陽に着きます。中国の北東部に位置し人口は五百五十万、中国で四番目の大都会です。ずっと昔から北東地域の政治、経済上の中心地でした。今日でも中国最大の重工業都市として、政治、経済上重要な役割を果たしています。

古代文明の残る都市として、世界中からますます多くの観光客を集めています。

瀋陽の歴史は、ほぼ二千年前に始まりますが、すでに六千年前には文明をもちはじめていて、新築遺址はその文明のなにかの証拠です。一六二五年、清朝の初代皇帝ヌルハチは瀋陽に首都を置くことに決め、盛京と名付けました。十年後、その宮殿、有名な瀋陽故宮が建てられました。

[illegible]

市の北部に有名な北陵公園があり、清朝の第二代皇帝と皇后が葬られています。その[illegible]のビルが、当時のままの姿で並んでいます。

中国最大の重工業都市として瀋陽は、毎年さまざまな自動車や機械を生産しています。そのほか、料理もとても美味しいものがあります。特[illegible]

市の東部には東陵公園があり、ヌルハチと皇后が葬られています。もしお出になる機会には、ぜひ食べてみて下さい。

[illegible]

国をあげて競馬に熱狂

リングランド・マリー（オーストラリア）

ニューカースルの高校でも競馬の日がやってくると、生徒はメルボルン・カップの競馬場で高価な帽子を被っている上流社会の人々を真似て、自分達で作った帽子を誇らしげに被ってねり歩く。ついに、競馬の始まる時間がやって来ると、授業が中断して、情熱的な三分間、皆の目がテレビの画面にくぎづけになる。全国同時に、老若男女を問わず、オーストラリア人は固唾をのんで、競馬を見詰めている。

一方、学生や社会人はメルボルン・カップのパーティーに出席して、そこでは、賭に勝った者を問わず、チキンとシャンパンを共に食す。

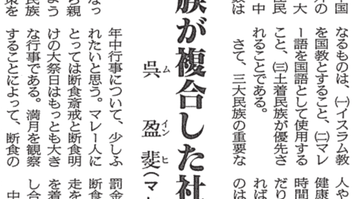
なぜメルボルン・カップがこれほどオーストラリア人の心を引き付けているのだろうか。オーストラリアは世界中からの移民によって建国された国家である。様々な文化を認め、一つに統合した社会である。オーストラリア人としての共通点は冒険を好み連帯深く信じていることである。

メルボルン・カップは願望の象徴であり、だからこそ、オーストラリア人の心をこれほどまでに引き付けているのだろうか。

（オーストラリア国立大学 交換留学生）

三大民族が複合した社会

呉盈斐（ム イン ヒ）（マレーシア）



雨林が茂り、花も咲き乱れている。

マレーシアは多様な民族、宗教、言語、文化等から成されている複合的社会である。人口はいわゆる三大民族、マレー系、中国系、インド系とそれ以外に土着民族で構成される。大部分のマレー系は村落住民なる自然環境を生み出されている。日さしの強さで熱帯地で生活をしている。

民族がそれぞれの異なった風俗習慣をもちながら親密に同生活をするように、建国以来マレー系民族を中心に、国づくり政策を始まる日は決定される。老年中秋節、端午節などの行事は、三大民族、マレー系、中国系、インド系とそれ以外の土着民族で構成される。大部分のマレー系は村落住民なる自然環境を生み出されている。日さしの強さで熱帯地で生活をしている。

年中行事について、少しふれたいと思う。マレー人にとっては断食斎戒と断食明けの大祭日はもっとも大きな行事である。満月を観察することによって、断食の

受験時代 PART II

受験時代の感情教育

秋元　秀紀

僕が受験準備をしていた頃――つまり受験時代というのは、それほど長くもない「自分史」の中で、まさしくくっきりと、一つの「時代」として浮かび上がるように感じます。浪人「時代」でした。三歳のときに保育園というものに入ってから、つねに何らかの団体・組織の一員であったのが、このとき何だか突然放たれ、社会にとって自分が目に見えない人間になったように思ったものです。

教員の中では珍種の部類に入るでしょうが、高校に通っていた頃には、まったく進学する気がなかった。それがまるで偶然のように、ひょんなきっかけで、大学というものに入ってみようと思った――それが僕の受験時代でした。呑気なものです。受験という戦争が同世代の若者の間に戦われていることに、本当に気づいたのは高校を終えてからだったわけです。

ところが、それでもまだ呑気に構え、勇猛果敢なる兵士の仲間入りするのは、まず僕には向いていないからよしとこう、とばかりに決め込んでしまった。高田の馬場にあったような気がする。

原因はわかっている。それまで中学、高校と連続五年間ただもうがむしゃらに打ち込んできた吹奏楽部の活動を高三になって受験準備のために引退せざるを得なかったせいである。それまでは、来る日も来る日も殆ど毎日が練習で、夏の全国大会に出場し、出場すればベスト8、ベスト4まで勝ち進むのだが、その度に応援に駆り出されるのである。それが終われば吹奏楽コンクール県大会出場の強化合宿。そんな毎日であったが、それなりの生活のリズムがあり、勉学とクラブとの両立は何とかうまくいっていた。

ところが高三になっていざ引退となると、何をどうすればよいのか生活設計がまるでモットーは、たしかアラブの俗諺だったと思うが、「明日できることを今日するな」であった。

こう書くと、ただの怠け者だったかのように思われるのの意識的に――むさぼるもうに読みました。映画や書物とは――それを自分のために思います。

映画に関してはむろんのこと、文学とか本もジャンルに関係なく――むしろ多様戦術気に構え、勇猛果敢なる兵士化英雄たちの書いた書物とは、おはぐらかけ離れたものを説く、入試戦争の実践や理とも思える試練――を、真剣に、おまじないのように映画館に出席し、そして読むまぶっ本を読んだ。あれほどたくさんの映画を観、本を読むまとまった時間は、もうはさまで見つけた、制度の自由な時間／空間でした。

受験と真正面から四つに組んで戦う人は立派です。受験という類のものだった。しかし、それは実に呑気な、余暇、文化、そして制度外の「学校」でさえあのありました。大学に行くことが決まったとき、今度はひとつ勉強をしてみるか、とも呑気に思ったものです。

（昭和五十六年度入学・文学部専任講師）

カタログ販売と受験

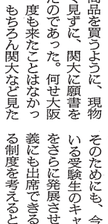
加勢田　博

「受験戦争」がはじまっていなかった頃に進学した者は、今よりはるかに幸わせであったのかもしれない。

とりわけ、私のように山の小さな複式（二学年一クラス制）の小学校で、もちろん塾などあろうはずもないところで育った者は幸運であったといえよう。高校でも大学に進学する生徒は少なく、したがって「進学」と「就職」というクラス分けすらなかった。私のように入試前になって受験勉強を必死にはじめるというのドロ・ナワ組も多く、冬休み明け以降は教室の掃除当番などは就職がすでに決まっていた仲間が引き受けてくれたのを覚えている。

ところで、当時は、今もそうであるが、受験しようとする大学がどんな大学か、どんな先生が教えておられるのか詳しいことはほとんど知らずに、受験パンフレットとあまりあてにならない他人の話を頼りに願書を出した。いわば「カタログ販売」で注文を出して商品を買うように、現物を全く見ずに、関大に願書を出したのであった。何せ大阪へは一度も来たことはなかったし、もちろん関大など見たこともなかった。ところが、幸いにも関大がカタログ通りの優れた環境で、そのようすばらしい先生にお会いすることは、大学の数と多様化が益々進んでいる昨今では、もはや時代遅れであろう。

（昭和三十七年度入学・経済学部教授）

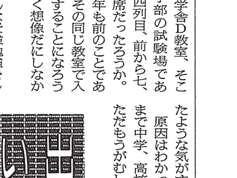


ラジオの思い出

井上　克人

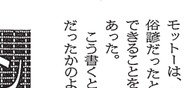
法文第一学舎D教室、そこが私の文学部の試験場であった。右から四列目、前から七、八番目の座席だったろうか。もう二十四年も前のことである。将来、その同じ教室で入試の監督をすることになろうとはまったく想像だにしなかった。

当時、どんな受験勉強をしていたのか、皆目思い出せない。ただ茫漠とした重苦しい日々が続いていただけであっ



天冒テキメン

葛原　力三



「受験勉強」というものの記憶は、私にはない。というのも、別に、記憶喪失でなければ、学内進学というわけでもない。むしろ所謂「県下一の（即ち田舎の）進学校」に通っていたからこそであろう。その学校の受験至上主義あえず試験で良い成績を取るための勉強のうって、気の向いたことだけを気の向くままに、つまり勉強のための勉強がしたいんじゃ」という、親や世間や級友、そして自分に対しても都合の良い言い訳をあみだし、その「勉強のための勉強」すらたいしてせずにひたすらダラダラと日々を過ごしていた。ちなみに当時の「受験戦争」がはじまっていなかった頃に進学した者は、今よりはるかに幸わせであったのかもしれない。

頃以降に中学、高校で学んだ人々にとってはなおさらのことであろう。これは、わが国の豊かさの表現が、進学競争という学校教育への異常なまでの傾斜となって現れたという、子供にとっては大変不幸な現象と無関係ではない。そういう意味からは、われわれの世代のように、昭和三十年代後半のまだあまり豊かとはいえない時代に、したがってどこで、ここで少々、見栄を張っておくと、実際に、何かテーマを決めて徹底的に調べるようなことは好きだったし、なぜか政治・経済の授業だけは熱心に聞いた。ただ、やはり高校の、ほんの表層だけをなでるような授業ではもの足りず、本当に興味をかされる自分のテーマが見つからなかったのである。では他の授業中は何をしていたかと言えば、雑誌やわりに現代国語や漢文の教科書を読んだり、理不尽なことを言う教師を論理的にコテンパンにやっつける方策を練ったり、迷路を作ったり落書きしたりしていた。やはりただの怠け者である。

それでも、「勉強のための勉強」を探すためには大学にいかねばならぬと思い定めて、なんとか関西大学にもぐりこんだ。たまたま最初に読んだのが刑法の教科書で、これが全く理解できないこと、誰も、早くしろ」とか「他の科目も勉強せい」などと言わんのが大学というところで、「これだけは、なんぼ時間がかかっても理解できるまで読んだれ」と思ってやってみるのである。ただ、やはり高校までの習慣が身に付いていない。で、大学院へ。

その後の何年間かは、そして現在それを仕事にしてしまって、「勉強のための勉強」に、ヒーヒー言ってなければならないは仕儀に到ったのは、思えばまさに高校時代に勉強しなかった報いであることに違いない。

なる。結局、例の言い訳の天罰テキメンということなのか。

（昭和五十三年度入学・法学部専任講師）

私の関大

二度目の受験

藤澤　等

私には東京の某大学と関西大学の二度の受験経験がある。それらの受験勉強は全く異なったもので、そのどちらもが思い出深い。一度目は家族への反感と反抗の中で勇ましく戦った受験勉強であった。これからお話する二度目の受験勉強は劣等感に悩まされ、まさに地獄の淵から這い上がるべき苦闘であった。

東京の学生運動に心身とも疲弊し、社会への憎悪と無力に打ちのめされ、救いを求めるようにして帰郷した私を待っていたのは、とんでもない修羅場だった。家の玄関をくぐると、姉は涙を浮かべて「これ以上母を家族を悲しませないで欲しい。おまえは家族の恥さらし。母は買物にも行けない」と言い、「家に帰ることはまかりならぬ。どこかで死んでしまえ。二度と家の敷居を跨ぐな」と追い払われてしまった。

私は勘当され、その日のねぐらもなく、ポケットには二千二百円が残っているばかりであった。あてもなく天王寺まで電車に乗り、駅に降り立った。「今日からは、自分が天王寺公園の浮浪者になるんだなあ」と、ぼんやり考えていた。頭の中が霧のように霞んでいて、公園を歩きながら寝られるところを探していたように思う。

どのように歩いたのか、市立夕陽丘図書館の前まで来た私は、疲れて座り込んでしまった。ぼんやりと階段の貼紙に「図書館員募集」の文字を見たその瞬間、館長室で「今日から雇って下さい」と言っていた。図書館前の文具屋で履歴書と印鑑を買い、「大学中退」の文字を書いた時、はじめて涙が出たのを憶えている。「俺は浮浪者になった」しみじみとした感慨だった。

当時は警備会社などというシャレたものはなく、図書館一冊にも込められていた。書架は人類の英知となって、永遠の命を持ち続けていた。ある日、手にした「集団の心理学」には関西大学教授、広田君美とあった。「こんなかを書ける人の顔がみたい」、それが私の進路の決定であり、「一生に一冊でいい、図書館に近ぶ本を書きたい」、それが私の受験勉強だった。だから、まだ私の受験勉強は終わっていない。

（昭和四十四年度入学・社会学部教授）

何のための受験勉強?

桜井　篤

私が関西大学工学部を受験したのは、一九七六年二月三日（火）であった。関西大学を初めて見たときは非常に緑が多く、広いキャンパスである感じた。特に、第1グランドが印象に残った。幸運にも、その年の二月十四日（土）に合格通知を受け取ることができた。

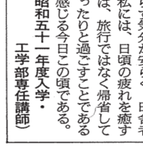
一九七六年はどういう年であったかを見てみることにする。

国鉄（現在はJR）は初乗り運賃が三十円であった。関大前には現在のようにゲームセンターが立ち並ぶようなことはなく、娯楽といえばニッショーの上のボウリング（ゲームが百円）や阪急ピアノードでのピリヤード（四玉やローテーション）であった。

私が関大に入学したのは一九七四（昭和四十九）年で、人生の半分が関大とつながっていることになる。このような長い付き合いになろうとは夢にも思わなかった。

当時、私は地方都市の一高校生で、陸上競技部籍を置き、その責任者をしていた。その関係で、生来ののんびり屋の私が入試の準備を始めたのは最後の県大会が終了した七月末だった。

当初、目標とする大学もなかったが、商学部ある以は法学部を受験することだけは決めていた。私の学力は地方の国立大学に何とか合格できるというのが模試等による判定であった。地方の国立大学が見えてきた年であった。一九七六年は一月に「山下さんの五ッ子ちゃん」が誕生したという明るいニュースで開幕した年であった。しかし、二月には本邦の戦後史の終章に「戦後日本の政治構造がはっきり崩れ始めた年」と記録されるだろうというロッキード事件があった。保守政権の中枢が商社や多国籍企業と結託し、それに右翼や政界もからむ、かつてない大規模な国際スキャンダルの暴露となった。この時、「黒いピーナッツ」、「ピーシーズ」、「灰色高官」、「政府高官」、「記憶にございません」などということ



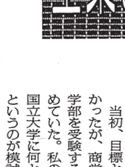
十大年前の日本

山出　和弘

私が入学したのは、大学の姿も映しだされている。関西大学は受験生に、どんな夢や目標を与える存在だったのだろうか。先生方のお話に、みなさんはきっと自分の体験を重ねてみて、大学生活についてあらためて考え直すきっかけを与えられることだろう。（編集部）　＝50音順＝

生来の のんびり屋

笹倉　淳史



私が関大に入学したのは一九七四（昭和四十九）年で、人生の半分が関大とつながっていることになる。このような長い付き合いになろうとは夢にも思わなかった。

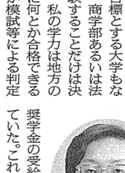
当時、私は地方都市の一高校生で、陸上競技部籍を置き、その責任者をしていた。その関係で、生来ののんびり屋の私が入試の準備を始めたのは最後の県大会が終了した七月末だった。

当初、目標とする大学もなかったが、商学部ある以は法学部を受験することだけは決めていた。私の学力は地方の国立大学に何とか合格できるというのが模試等による判定であった。地方の国立大学が大都市圏の私大のいずれを受験するのか迷ったが、結局、地方より都市の方が良いという周囲の助言（生活の便利さ、書籍の入手しやすさ等）を受けて大都市の私大を受験することに決めた。その候補の一つに関大商学部が入っていた。

この頃、私の知らないうちに担任の教師によって高校の大学に急に親近感を覚えた。なぜそのように詳しいのかと聞くと、当時、職業軍人として軍事教練を行ったことがあるという説明であった。

運良く複数の大学及び学部に合格できたが、商学部に行くか法学部に行くかについて最後まで迷った。叔父から、兄が法学部だから、弟（私）は商学部の方がいいのではという助言を受けて、また、司法試験と並んで難関とされる公認会計士試験が存在することを知り、公認会計士試験を目指してみてもいいなと思った。これによって、私の関大商学部への入学は決定した。

（昭和四十九年度入学・商学部助教授）



受験勉強

笹倉　淳史

「受験勉強」というものの記憶は、私にはない。というのも、別に、記憶喪失でなければ、学内進学というわけでもない。むしろ所謂「県下一の（即ち田舎の）進学校」に通っていたからこそであろう。その学校の受験至上主義に嫌気がさした私は、取りあえず試験で良い成績を取るための勉強のうって、気の向いたことだけを気の向くままに、つまり勉強のための勉強がしたいんじゃ」という、親や世間や級友、そして自分に対しても都合の良い言い訳をあみだし、その「勉強のための勉強」すらたいしてせずにひたすらダラダラと日々を過ごしていた。ちなみに当時の

奨学金の受給手続きが完了していたこれによって、のんびりと受験勉強をしようと思っていた私は、なんとしても現役で合格しなければならないことになった。というのは、その奨学金は現役合格者にのみ支給され浪人を対象とする権利は失効するものであったからである。このことは私には担当のプレッシャーとなった。

（昭和五十二年度入学・工学部助手）

何のための受験勉強?

桜井　篤

科でも広い領域を含んでおり、当時から学科名からは想像できない研究が行われていることも多かった。さらに、現在の受験生には当たり前の存在と思われるコンピュータが、我々の学生時代から急速に発達し、工学の分野だけでなく、広く社会全般にわたる変革をもたらしている。

現在の高度な問題を的確に決めかねている状態であった。入試要項などを調べても、どの大学の工学部の学科にも具体的なイメージがよく掴めず、物理系の学科を受験しようと考えていたが、化学系の学科にも魅力を感じていた。

そのような状況で、機械工学のいわゆるメカニカル系部分がなんとなく、面白そうだという程度の考えで機械系の学科を受験することに決めた。しかし、あまり明確な志望動機をもっていなかった私が抱いた機械工学に対するイメージは、機械工学のほんの一部分しか捕らえられていないことを入学後に思い知らされることになる。

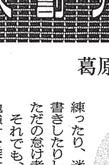
工学は応用的な色彩の強い学問であり、従来の学科名から受けるイメージよりどころとえるためには、最先端の専門知識とともに広い基礎的知識が要求されると考えられる。広い知識を得るためには、それ相応の時間が必要である。

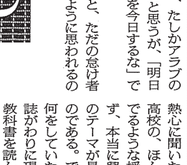
そのため、受験勉強を大学入学のための勉強と考えず、今後の自分の基礎を作るための一過程ととらえ、大学で自分が目指す学問の入口の部分はすでに入学前から独力で学び始めていると考え、的確に理解しておくことが必要であると思う。

（昭和五十二年度入学・工学部助手）

天冒テキメン

葛原　力三





熱心に聞いた。ただ、やはり高校の、ほんの表層だけをなでるような授業ではもの足りず、本当に興味をかされる自分のテーマが見つからなかったのである。では他の授業中は何をしていたかと言えば、雑誌やわりに現代国語や漢文の教科書を読んだり、理不尽なことを言う教師を論理的にコテンパンにやっつける方策を練ったり、迷路を作ったり落書きしたりしていた。やはりただの怠け者である。

それでも、「勉強のための勉強」を探すためには大学にいかねばならぬと思い定めて、なんとか関西大学にもぐりこんだ。たまたま最初に読んだのが刑法の教科書で、これが全く理解できないこと、誰も、早くしろ」とか「他の科目も勉強せい」などと言わんのが大学というところで、「これだけは、なんぼ時間がかかっても理解できるまで読んだれ」と思ってやってみるのである。ただ、やはり高校までの習慣が身に付いていない。で、大学院へ。

その後の何年間かは、そして現在それを仕事にしてしまって、「勉強のための勉強」に、ヒーヒー言ってなければならないは仕儀に到ったのは、思えばまさに高校時代に勉強しなかった報いであることに違いない。

なる。結局、例の言い訳の天罰テキメンということなのか。

（昭和五十三年度入学・法学部専任講師）

受験時代の感情教育

秋元　秀紀

僕が受験準備をしていた頃――つまり受験時代というのは、それほど長くもない「自分史」の中で、まさしくくっきりと、一つの「時代」として浮かび上がるように感じます。浪人「時代」でした。三歳のときに保育園というものに入ってから、つねに何らかの団体・組織の一員であったのが、このとき何だか突然放たれ、社会にとって自分が目に見えない人間になったように思ったものです。

教員の中では珍種の部類に入るでしょうが、高校に通っていた頃には、まったく進学する気がなかった。それがまるで偶然のように、ひょんなきっかけで、大学というものに入ってみようと思った――それが僕の受験時代でした。呑気なものです。受験という戦争が同世代の若者の間に戦われていることに、本当に気づいたのは高校を終えてからだとでしたが、本もジャンルに関係なく――むしろ多様戦術気に構え、勇猛果敢なる兵士化英雄たちの書いた書物とは、おはぐらかけ離れたものを説く、入試戦争の実践や理とも思える試練――を、真剣に、おまじないのように映画館に出席し、そして読むまぶっ本を読んだ。あれほどたくさんの映画を観、本を読むまとまった時間は、もうはさまで見つけた、制度の自由な時間／空間でした。

受験と真正面から四つに組んで戦う人は立派です。受験という類のものだった。しかし、それは実に呑気な、余暇、文化、そして制度外の「学校」でさえあのありました。大学に行くことが決まったとき、今度はひとつ勉強をしてみるか、とも呑気に思ったものです。

（昭和五十六年度入学・文学部専任講師）

ラジオの思い出

井上　克人

法文第一学舎D教室、そこが私の文学部の試験場であった。右から四列目、前から七、八番目の座席だったろうか。もう二十四年も前のことである。将来、その同じ教室で入試の監督をすることになろうとはまったく想像だにしなかった。

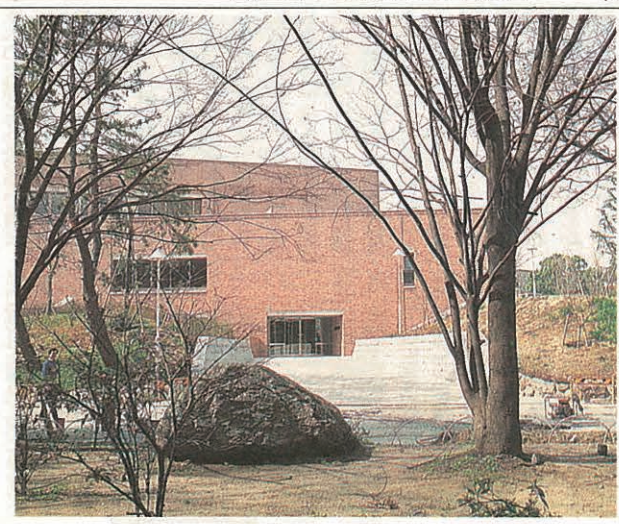
当時、どんな受験勉強をしていたのか、皆目思い出せない。ただ茫漠とした重苦しい日々が続いていただけであっ

西村食堂の二階の吹奏楽部の部屋に足を運んだ。当時、関大の吹奏楽部は関学と並んで全国で二、三を争う最優秀校だった。たまたま先輩が部長をしていたので、入部したい旨を相談に行ったのである。

先輩曰く、「ここは関西大学吹奏楽（学）部だ。気持ちは嬉しいが、練習も苛酷だし、勉学との両立などとても無理だ。ましてハンカラな気風に慣れていないお前には、とてもじゃないが、君のその情熱を勉学の方に向けてみてはどうだ。むしろそのほうが君自身にふさわしいと思う」。私は承服できず、それからも再三入部を請うたが、ついに聞き入れてはくれなかった。

学園紛争の嵐が吹き荒ぶ前の年の春のことである。

（昭和四十三年度入学・文学部助教授）


情報処理センターの正面入口

情報処理センターから

コンピュータの利用者ID

後期から学生全員に付与

関西大学情報処理センターは全学共同利用施設であり、教育・研究および事務処理におけるコンピュータシステムの適正かつ効率的な利用をはかるために設置されたものである。

現在、情報処理センターには、教育・研究用として大型汎用コンピュータFUJITSU M-780/10と、スーパーコンピュータVP-2100/10が、事務用として大型汎用コンピュータM-760/4（本年九月、M-1600/8にレベルアップの予定）が設置、運用されている。大学院学生および学部学生は、これらのうち、教育・研究用システムを使用できる。

初・中等教育での情報教育の浸透

一九八七年十二月の教育課程審議会の答申で「情報教育」がうたわれたのを受けて、文部省は、一九八九年三月の告示「新学習指導要領」において、各教科にコンピュータを利用する項目を盛り込んだ。

そこで、中学校では一九九三年度から「技術・家庭」、「数学」、「理科」の授業で、高校では一九九四年度から「数学」、「物理」などの授業でパソコンを導入した本格的な情報処理教育が開始される。小学校でも、教科は特に言及されていないが、「総則」の中で情報処理教育に触れており、コンピュータを使うための教育とコンピュータを使った教育がなされる。

これらは、すべての児童・生徒に対して、情報リテラシー（情報活用能力）を身につけさせるためであり、情報および情報手段を主体的に選択し活用していくため個人の基礎的な資質を育成しようとするものである。

学生全員に利用者IDを

これら大学を取り巻く社会の情報化への潮流に対応するため、本年九月より、関西大学のすべての学生に、情報処理センターの教育・研究用システムを使うために必要な利用者ID（利用者番号）が与えられる。この利用者IDは、学籍番号に対応しており、学部（または学科）を表すアルファベット1文字と数字6文字を組み合わせて、決められている。

情報処理センターを利用する学生たち

在学生は、何ら特別な手続きをすることなしに、自分だけの利用者IDを使って、大型コンピュータを使うことができる。この利用者IDは卒業するまで有効である。

利用者IDは銀行のキャッシュカードなどと同様に、パスワード（英数字を組み合わせた文字列）で保護されているので、他人は使うことができない。

端末から何ができるのか

この自分だけの利用者IDを使って、情報処理センターあるいは各学部のステーションに設置されている端末またはパソコンから、大型コンピュータに接続すると、次のようなことができる。自宅のパソコンやワープロからも、電話回線を通じて接続し、同様のことができる。

① 図書館の蔵書の検索

関西大学総合図書館が所蔵している、百数十万冊の図書および雑誌の書誌情報を検索することができる。書名、著者名、出版社名などの一部（キーワード）が分かっているときに、その図書があるかどうか、ある場合には、その所在場所を調べることができる。

② 電子メールの利用

コンピュータシステムを使用して、学内の教員や学生の間でメッセージを交換することができる。これを電子メールという。電話と違って、相手が不在でもメッセージを送れるし、端末やパソコンがあればどこからでも開封することができる。

③ 教員から学生への伝言

教員が担当科目の受講学生に伝えたい連絡事項をコンピュータに登録しておけば、学生はいつでも、どこからでも端末の画面に表示させることができる。

④ 電子会議室

電子会議室は、システム内にグループ専用の会議室を設け、そのグループに属する教員・学生が、互いにメッセージを書き込んだり、読んだりできるシステムである。ゼミや研究室の討議や連絡に使える。

⑤ 就職情報の表示

現在、就職システムを開発中である。これが完成すれば、企業情報データベースを検索して、企業の概要、過去の採用実績、関西大学出身者名簿、求人情報などを調べることができる。

大型コンピュータへの接続方法や前記のサービスの利用法を簡単にまとめたパンフレットが、九月初旬より情報処理センター窓口に備えられる。参照されたい。

高度な情報活用能力を

大学院学生や学部学生が、専門分野の用途で教育・研究用システムをより高度に使う場合は、別に、利用申請をする必要がある。

申請手続きとしては、卒業研究など研究利用の場合は、指導教員の許可を得て、センター備え付けの利用申請書を提出する。授業など教育利用の場合は、担当教員が授業科目ごとに利用申請書を提出すればよいことになっている。

将来の高度情報社会に生きるには、より高度で創造的な情報活用能力を備える必要がある。そのために、整備されたコンピュータ設備などを十分に活用して貰いたい。

ソフトウェア・コンテスト

作品募集

情報処理センター主催、富士通㈱協賛による第二回ソフトウェア・コンテストを次の要領で実施します。

このコンテストは、独創的なソフトウェアの発掘と、利用者が相互にコンピュータ利用技術の研鑽を積むことを奨励するために行うものです。

ホストコンピュータ向けに、学部学生および大学院学生が作成したソフトウェアの中から優秀作品を選び表彰します。

若者らしい独創性が豊かで、斬新性に満ち溢れた作品の応募を期待します。

＜応募要領＞

◆対象ソフトウェア

応募ソフトウェアは、情報処理センターのホストコンピュータによって再現（鑑賞）が可能なものに限ります。

◆部門

①プログラミング部門
②アプリケーション部門
③コマンドプロシジャ部門
④カタログドプロシジャ部門
⑤グラフィックス部門
⑥その他の部門

◆提出内容

①ソース・プログラム（サンプルデータ／JCL）
②ドキュメント

作品の目的、背景、工夫した点、特徴などの説明、参考文献などの客観的資料

③計算処理結果

なお、体裁については、センター事務室で配布している応募要領を記載したパンフレットを参照してください。

◆募集期間

受付開始　七月十日（金）
締切日　九月三十日（水）

◆結果発表

結果発表は十月二十三日（金）、情報処理センター内に掲示します。あわせて、BBSで知らせるとともに、応募者には、学内電子メールによって通知します。

◆表　彰

表彰は学園祭の期間中に行います。優秀な作品には、賞状と賞品が贈られます。

＜応募作品提出要領＞

作品は、学内電子メールを使ってZ00003O宛に、応募部門を明記して提出してください。ただし、電子メールで送りにくい場合は、データセットによる提出も受付けますのでその旨を申し出てください。

なお、応募作品の著作権は、情報処理センターに帰属するものとします。

＜問い合わせ先＞

関西大学情報処理センター
内線4442

Book 新刊紹介

商学部助教授　平山健二郎他訳
デービッド・ゴーランド著
『一九九〇年代の金融規制』
（有斐閣・二〇六〇円）

バブルが破裂し、証券をはじめとして金融機関の不祥事が相次いだことは記憶に新しい。そして金融システムが急速に変化するなかで金融機関は厳しく対応に迫られた職場として映るらしく、学生諸君の金融界への就職希望は冷めてきているようだ。

金融業は運輸業とならんで規制が多い産業である。しかし、国鉄の民営化、第二電電の参入など規制緩和はサービスの向上や料金の引き下げをもたらしている。果たして金融業は規制を強く必要とする特殊な業界なのであろうか。また政府規制によるマイナスはないのだろうか。

本書はアメリカやイギリスにおける金融自由化の経験を踏まえて、金融規制の功罪を広く検討している。とりわけ理論と現実のバランスがうまくとられている。訳もこなれていて読みやすく、金融業のありかたを考える上で大変参考になる。（田中茂和）

社会学部助教授　大石　裕著
『地域情報化―理論と政策―』
（世界思想社・一九五〇円）

社会科学の諸領域は、ややもすれば、こうした変容過程を現実追随的に分析するか、もしくは、政策決定に無批判に関与するなどして、その社会変動の意味と意義を十分に検証してきたとはいいがたい。本書の有意義な点の一つは、「情報開発」という概念を提示し、駆使しつつ、これまでの日本における情報化の実態を理論的に明らかにし、その政策上の課題と問題点を批判的に吟味したところにある。

著者の政治社会学上の識見と、かつて電気通信政策総合研究所に在籍していた当時の知見とが十分に生かされた好著といってよい。（林　利隆）

名誉教授　西岡孝男著
『技術と労働問題』
（関西大学出版部・二〇〇〇円）

本書は、第一章「古代技術と労働―ピラミッド考―」、第二章「日本技術史の一断面」、第三章「日本工場法成立の周辺」、第四章「日本的経営の国際的適応性」、第五章「経営参加と団体交渉―労使関係の国際比較のための覚え書き―」、第六章「技術革新―マイクロエレクトロニクスについて―」、第七章「湾岸戦争における隠れた日本の貢献」、第八章「台湾・経済労働事情の報告」の八章から構成される。

内容は、ピラミッド、火縄銃からマイクロエレクトロニクスにいたる技術の発展を歴史的に辿るとともに、アメリカと西ドイツの経営参加と団体交渉、日本の労使関係の特質、日本的経営の特質、近年の技術革新の労働に対するインパクトなど、ひろく労働、日本の経営と経済の諸問題の論考である。論点は、非常に複雑で多面的である。

本書では、多くの混迷と葛藤が存在する人間の問題である労働問題がきわめて明確に解かれており随所に興味深い考察を見ることができる。とりわけME化が進展するなかで著者により摘出された問題点は重要であり示唆するところが多い。是非一読をすすめたい力作である。（大田昭夫）

今月の表紙

大庭　脩（おおば・おさむ）**教授**　漢代木簡研究では、世界的な業績をあげておられるが、日中関係史にも造詣が深く、昭和六十一年に日本学士院賞を受賞された。

▶編集後記◀

いよいよ夏休みも目前に迫ってきた。学生諸君はそれぞれ計画を立てて、休暇を待ちかねていることだろう。照りつける太陽の下で、海や山に出かけて、美しい自然の中で思いきり身体を動かし、快い汗をかくのは夏ならではの大きな喜びである。

一方、夏休みは心に休養を与える大切な期間でもある。現代人にとっては、ゆっくり自分だけの時間を楽しむことは、特に得難い贅沢となっている。そこでは自分の心を自由に解き放つことができる。夢を追うことも、好きな書物に没頭することも、静かに自分の姿をみつめ直してみることも可能である。

今月号は、そのような観点をもこめて、先生方に研究の夢を語り、青春の模索する自画像を描いていただいた。（樋口・廣瀬）